

だけでしょうか？ 幼稚園教育要領の中の「ゆとり  
の中で生きる力を育み」、保育所保育指針にある  
「子どもが、現在をもっとも良く生き、望ましい未  
来を作り出す力の基礎を培う」ためにはそばにいる  
大人たちが豊かに生き、身をもってその手本となる

姿勢を示していくことが大切でしょう。様々な情報  
が入り、若い保育者の方々が知識や技法を学ぶ機会  
は以前よりずっと増えたと思いますが、保育の原点  
に立ち返ることを忘れないで頂きたいと願っており  
ます。  
(臨床発達心理士)

## かたいリュックサックへの憧れと、 かたい言葉へのとまどいと

菊地 知子

およそ「かたい」ことと自分とは縁遠く思え、む  
しろ語るべきは、やわらかに、しなやかに、優しく

あることに多いのに、とも思ったが、ふと、今は高  
校生になる娘の幼い日々に思いが至る。

ある時家の中で、ふむふむ鼻歌を歌いながら一人絵を描いていた娘が、思い出した、というようにすつくと顔を上げて私に問うた。

「おかあさん、あの『かたいリュックサック』は何て言うの？ かっちゃんリュック？」

私の答えも待たぬまま、まだ赤ん坊の弟の方に振り向いて言う。

「もう少しお兄さんお姉さんになったら『かっちゃんリュック』買おうね。そして『かっちゃんリュック』背負って、一緒に学校に行こうね」

娘の言うかたいリュックサックというのは、そう、ランドセルのことに他ならなかった。いつもいづも、何かを心待ちにしている娘である（思えばそれは、今に至ってもそのままであるのだが）。その幼い日の『かたいリュックサック』への憧れは取りも直さず小学生になることへの憧れであった。小学生の具体的な姿が、その頃娘に良いイメージだけを与えていたとは思えないのだが、なぜか娘は、かた

いリュックサックの中にお堅い教科書を詰め込み、真面目に、したり顔で勉強に勤しむ姿に、健気な程に憧れを抱いていたのである。社宅暮らしだった娘には、小学生の知り合いも多かった。そして幾人もの小学生が、幼い子どもや、子どもと居ることをどうやら一向に厭わない。「おばちゃん」（私）のいる我が家を頻繁に訪れ、ある時期など我が家は、小学生の駆け込み寺のようでさえあった。時には、たとえば友達との関係に心が傷み、傷んだ心のままに訪ねて来た小学生が娘に八つ当たりするようなこともあった。それでも、近所の小学生までも巻き込んで幼い娘の生活が展開する中で、小学校という今とは異質なステージに行っても、自分は変わらず愛されるという確信だけは、娘の中にかくあったのかもしれない。

いつの間にか、娘はすつかり小学生が板に付き、赤ん坊だった息子も、『かっちゃんリュック』を背負って学校に行くようになる。時を同じくして、未

娘Yは待ちに待った入園の日を迎えた。六歳上の姉も、三歳上の兄も通った、小さな幼稚園である。親の出番も多く、Yは入園前から私に連れられ四六時中通っていたし、園児や先生とも仲良しだった。

入園式は、言われるがまま椅子に座り写真を撮られ、訳もよくわからぬうちに終わった。翌日から、家の前の道から八人乗りのワゴン車に乗って、意気揚々と通う、はずであった。ところが、兄を毎朝見送った時とは、迎えに来てくれた車も乗る場所も、更には乗っているメンパーも引率の先生も、まるきり違う。話はわかっているはずと置いていたが、黙ったまま怯えるように「私は一体どうなるの?」とでも言いたげにこちらを見ている娘を乗せて車は動き出した。急に心配になり、そのまま自転車を追走したい程だった。果たして翌日、娘は、車の乗り場に行きたくないと言う。「幼稚園いやなの?」と訊ねると「お母さんと行きたいの」と言って泣く。私は不思議なほど素直に、「ああ、ここはいよいよ

私の出番だ」と思った。子どもはそもそもあつという間に大きくなりすぎる。長女の時からの私の嘆きは、下の子になるほど大きくなっていた。だいたいこの

子は三番目なのだから、ゆっくりゆっくり大きくなればいいのに、いつの間にか、姉兄に紛れるように、ごちゃごちゃの中で勝手に大きくなってしまったのだ。幸いにして、送っていく時間は確保できる。ここで必要とされずして、いつ私の出番があるだろう。娘の要求に私はむしろはりきった。

歩くには遠い道のりを、ある時は二十五分自転車をこいで、ある時は二駅電車に乗って、絢爛すぎるサツキの花に驚いたり、ひっそりと咲くガクアジサイに惚れ惚れしたりしながら、娘との幼稚園への道中を楽しんだ。年少児は週休三日ののんびりした園のこと、四月の間は連れて行ってもすぐに帰る時間



になるので、一時間程を教室で待たせてもらった日もある。「あなた、先生？ それとも子ども？」と、三歳児に真顔で聞かれたり、油粘土をこねてひたすら長くして喜ばれたり、なにより娘が、心細くない笑顔で過ごす時が増え、僅かずつだが確実に、園を自分の居場所にしていくことがわかり、嬉しかった。

五月の親子遠足を特集記事にすべく、母親仲間と機関誌発行のため園に集まっている時だった。一人の母親が、みんな心配しているんだけど、と前置きした後で「Yちゃん、まだ不適応起こしてるの？ 登園拒否みたいって聞いたけど」と訊ねてきた。そういうえば遠足の時、あまり話をしたことのない母親に「下の子はラクって聞くけど、大変ですね」と言われたことを思い出した。『不適応』とやらを起している『登園拒否』寸前のお子さんで大変ですね、ということだったのか。私の知らぬ間に娘は、そんなかたい言葉でレッテルを貼られていたのだっ

た。「幼稚園がいやなわけじゃなくて、私と来たいんだって」とやつの思いで言っではみた。相変わらず明るくて穏やかで優しく、見ての通りだよ、とも言いたかったが、涙が出そうになってやめた。たとえ本当に園に馴染めず、実際通えずにいたとしても、三歳の子どもの生活を語るのに先の言葉はあまりにも不釣り合いだし、子どもの生きている姿にほど遠い。学生時代からあれほど自分が注意深く拒んできた、レッテルを貼るといふことの罪深さを、かたい言葉で括られてみて改めて納得した。

そんな母親の葛藤をよそに、年少組も終わる頃、「あの時本当は、ランドセルしよってK（兄）と学校へ行きたかったんだよ。幼稚園じゃなくて。お母さん、知ってた？」と娘は言っ、ふんわりと笑った。

（千葉県 ひだまり文庫）